

当報告の内容は著者の著作物です。

文法研究ワークショップ（第5回） 複数性（1）

開催日時：2014年（平成26年）2月1日（土曜日）14時30分～17時30分

開催場所：AA研マルチメディアセミナー室（306室）

報告1

報告者名：宮川創（京都大学大学院）

報告タイトル：コプト・エジプト語サイド方言の複数性

報告2

報告者名：新永悠人（日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学）

報告タイトル：文法数の恣意性：北琉球奄美大島湯湾方言において1つの対象を指す「複数」標識

コーディネーター：阿部優子（AA研特任研究員）、梅谷博之（AA研特任研究員）、
海老原志穂（AA研研究機関研究員）、大島一（AA研研究機関研究員）

ワークショップ概要：

2013年度の文法研究ワークショップは「複数性」について2回開催する。今回はその第1回目で、2名が発表した。会場の参加者は11名であった（発表者、主催者を除く）。また、Ustreamを通じてインターネット上で放送し、6名が視聴した。Ustreamの視聴者からの質問は、ソーシャルストリーム（チャット機能）により受け付けた。

最初の報告者の宮川創氏（京都大学大学院）は、コプト・エジプト語サイド方言の定冠詞において、数がどのように標示されるかを、特に名詞が数詞によって修飾される場合に注目して記述した。

次に、新永悠人氏（日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学）が、北琉球奄美大島湯湾方言について発表した。湯湾方言には、複数を表す標識が1つの対象を表す場合があるが、その際の意味・用法を記述した。

2件の発表では、現象の詳しい記述に加え、「複数」に関する通言語学的な理論・分類を視野に入れた議論が展開され、質疑応答でも幅広い討論が行われた。

報告書作成：梅谷博之（AA研特任研究員）

報告要旨

報告 1 : 「コプト・エジプト語サイド方言の複数性」(宮川創, 京都大学大学院)

コプト・エジプト語サイド方言には、様々な品詞で単数と複数の文法的数を標示させる義務がある。その義務は定冠詞、前置詞、動詞の人称変化に顕著にあらわれる。ところが、定冠詞に限って、修飾する名詞が数詞によって修飾されると、単数・複数の区別にかかわらず、単数形をとる。この点で、定冠詞は特異である。本発表では、サイド方言訳『ルカによる福音書』(Horner 1991) の定冠詞つき名詞と数詞の共起表現と動詞など他に文法数が標示される要素との照応を観察した後、その観察に基づき、従来のサイド方言の定冠詞の「単数形」と「複数形」は、通常の単数と複数を反映しているのではなく、それぞれ定数と不定数を表していると主張する。

報告 2 : 「文法数の恣意性：北琉球奄美大島湯湾方言において1つの対象を指す「複数」標識」(新永悠人, 日本学術振興会特別研究員/東京外国語大学)

北琉球奄美大島湯湾方言において、単数（および代名詞では双数）と対立する文法数である複数を標示する形態素に関連して、以下の4点を考察した。

- ・2つ以上の対象を指すことのできる形式が、(実質的に)一つの対象を指す用法がある。
- ・湯湾方言の「複数」標識は、日本語標準語のナンカのように「典型」または「再定義された前提」という意味を表すことができる。
- ・湯湾方言の「複数」標識は、普通の複数 (ordinary plural) と近似複数 (associative plural) の意味特徴のそれぞれに類似点・相違点がある。すなわち、文法数の枠組みで捉えることができる。
- ・湯湾方言の文法数は、通言語的に見て非常に特殊な数体系 (singular vs. plural/general) である。